

## 「俣賀文書」の史料学的基礎考察

The Mataga Documents in Historiographical Perspective  
TANAKA Hiroki

田中大喜

はじめに

二〇一六年度から開始した、筆者が研究代表者を務める国立歴史民俗博物館共同研究「中世日本の地域社会における武家領主支配の研究」では、中世武士の領主支配が地域社会に受容された諸契機を究明するべく、石見国高津川・益田川下流域社会（現島根県益田市）を基軸事例に取り上げている。本共同研究の目的に迫るうえで、当該地域に割拠した中世武士の家伝文書群は、不可欠の検討素材になることはいうまでもない。国内屈指の点数を誇り、中世に限っても八百点もの文書をいまに伝えている、益田氏の家伝文書群である益田家文書はその筆頭であるが、「俣賀文書」<sup>(1)</sup>もその一つである。

「俣賀文書」は、遠江国内田荘下郷（現静岡県菊川市）を本領とした鎌倉幕府御家人内田氏の庶流である俣賀氏の家伝文書群である。承久の乱の勲功により、幕府から石見国貞松名（現島根県浜田市）と同国豊田郷（現島根県益田市）の地頭職を給付された内田致茂は、嘉禎二年

（一二三六）六月、子息弥益丸に対し「豊田郷内俣賀・横田自中道下田畠在家地頭職」を譲与した。<sup>(2)</sup>父致茂より豊田郷俣賀の地を継承したこの弥益丸が、俣賀氏の祖致義であるが、「俣賀文書」は致義の子円戒の子孫（下俣賀氏）が伝えた文書群となる。<sup>(3)</sup>

「俣賀文書」の現存総数は一二一点であり、すべて中世文書となっている。益田家文書にははるかに及ばないものの、高津川・益田川下流域社会に割拠した中世武士の家伝文書群のなかではそれに次ぐまとまった分量を持ち、当該地域における中世武士の動向を追究するうえで好個の史料となる。ところが、これまでに「俣賀文書」は全点活字化されて広く紹介されているものの、<sup>(4)</sup>原本調査によって得られる書誌情報についてはほとんど明らかにされていないのである。本共同研究の目的追究のみならず、中世の西石見地域の様相をいっそう明らかにするうえで、今後「俣賀文書」をより深く分析していく作業が求められるが、そのためには「俣賀文書」の書誌情報の収集・把握は必須になると考える。<sup>(5)</sup>そこで筆者は、二〇一六年度に「俣賀文書」全点の原本調査を実施し、書誌情

報の全容把握を行った<sup>(6)</sup>。本稿は、その調査成果の公表であるとともに、原本調査によって得られた書誌情報の一部から、近代表装時の「保賀文書」の状態復元を試みたものである。

「保賀文書」原本の閲覧・調査にあたり、各所蔵機関・所蔵者からは多大なご高配を賜った。ここに記して感謝申し上げる。

## 一 「保賀文書」の書誌情報と現状概要

前述したように、「保賀文書」の現存総数は一二一点に上る。嫡流家の内田氏も、九十六点の家伝文書群を残しているが、すべて写本である。これに対し「保賀文書」は、一二一点すべてが原文書の形態で伝わっており、しかも中世文書のみとなっている。これが「保賀文書」の大きな特色となる。

現在、「保賀文書」は、日本大学図書館（以下、日本大学）に九十四点、花園大学情報センター（図書館）（以下、花園大学）に二十二点、皇學館大学文学部国史学科（以下、皇學館大学）に三点、足利市民文化財団（以下、足利市）と恵良宏氏のもとに一点ずつ、それぞれ分散して所蔵されている<sup>(7)</sup>。このように五つの所蔵機関・所蔵者のもとに分散しているという現状が、書誌情報の総体的な把握を困難にし、今日までその全容が明らかにされてこなかった大きな要因になっていると見られる<sup>(8)</sup>。

本稿末尾に掲げる【表1】～【表4】は、二〇一六年度に実施した「保賀文書」全点の原本調査から得られた書誌情報について、各所蔵機関ごとにその成果をまとめた目録である<sup>(9)</sup>。「保賀文書」一点ごとの書誌情報については、この目録に目を通すことで把握できると思われるので、本章では各所蔵機関ごとの「保賀文書」の概要についても合わせて紹介しておきたい。その際、次章で詳述するように、分散する以前の「保賀文書」は、(A) 保賀氏内部で作成された文書、(B) 将軍・守護・大將等の発給文書、(C) 王家（南朝）の発給文書、(D) 益田氏の発給文書、

という内容に即した四巻の卷子装に表装されていたと推測できることから、この分類に則してまとめることにする。

最初に、全体の三分の二以上を有する、日本大学所蔵の「保賀文書」を見てみよう。本文書群は、六巻の卷子装に表装されているが、すべての巻子の見返し末に「月明荘」の蔵書印が押されていることが確認できる。「保賀文書」は、昭和四十年代に一紙ずつに裁断されて売りに出されたというから、現在の卷子装はこれを購入して昭和五十五年（一九八〇）に日本大学に売却した古書肆弘文荘によって表装されたものと見られる。

さて、本文書群は、(A) に該当する文書が四点【表1】No. 2・3・4・33、(B) に該当する文書が二十八点【表1】No. 6・13・15・20・25・29・31・32・34・42・44・45、(C) に該当する文書が九点【表1】No. 16・19・21・24・30、(D) に該当する文書が五十三点【表1】No. 5・14・43・46・95<sup>(10)</sup>、で構成されている。一見してわかる通り、本文書群は益田氏の発給文書が大半を占める一方、保賀氏内部で作成された文書が僅少となっており、これが本文書群の特色といえる。

益田氏の発給文書は、保賀氏が益田氏に臣従した戦国期のものが大多数となっているため、本文書群は必然的に戦国期の文書が多いことになる。また、(A)～(C)の文書はいずれも十四世紀以降の文書であることから、本文書群は「保賀文書」の大半を保持するものの、その後半期の文書によって構成される文書群と位置づけられる。

次に、日本大学に次いでまとまった分量を保持する、花園大学所蔵の「保賀文書」を見てみよう。本文書群は、徳治二年（一三〇七）四月二日付六波羅下知状【表2】No. 4のみが卷子装で、ほかはすべて一紙物の状態で保管されている。花園大学によると、卷子装にされているこの文書は、平成五年（一九九三）に本文書群を同大学に寄贈した収集家の飯島一郎氏が表装したものであり、寄贈後、軸を現在のものに改めた

という。

本文書群の構成を確認すると、(A)に該当する文書が九点〔表2〕No 5・8・9・12・13・17・19・21)、(B)に該当する文書が十二点〔表2〕No 1・4・6・7・10・11・14・16・20)、(C)に該当する文書が〇点、(D)に該当する文書が一点〔表2〕No 22)、となっている。数量的に最も多いのは(B)の文書であるが、日本大学所蔵のものとは比べると、(A)の占める割合が高い点が注目される。なお、(A)の文書は九点しかないが、これは「俣賀文書」の所蔵機関・所蔵者のなかで最も多い点数となる。したがって、俣賀氏内部で作成された文書が多く含まれていることを、本文書群の特色と認めることができる。

本文書群を構成する各文書の作成時期についても、日本大学所蔵の「俣賀文書」とは対照的であることが確認できる。すなわち、本文書群の大半は十四世紀までの文書であり、日本大学にはない十三世紀の文書が三点含まれているのである。これらのうち、嘉禎二年十二月十五日付將軍家政所下文〔表2〕No 1)は、「俣賀文書」のなかで最も古い文書となっている。これらのことから本文書群は、「俣賀文書」の前半期の文書によって構成される文書群と位置づけられる。

最後に、皇學館大学および恵良氏所蔵の「俣賀文書」と、足利市所蔵の「俣賀文書」をしてみる。前者は五点を数えているが、これらのうち年月日欠の某書状断簡は本来除外されるべき文書となる。というのも、皇學館大学の教員を務めておられた恵良氏によると、本文書は、昭和六十年(一九八五)に皇學館大学が古書肆思文閣から購入を予定した「俣賀文書」四点〔表3〕No 1・2・3・5)の包紙にされていたものといひ、内容的にも俣賀氏と関係がないと判断されるからである。皇學館大学所蔵の「俣賀文書」は、某書状断簡を除いてすべて掛幅装になっているが、同じく恵良氏によると、これは平成十八年(二〇〇六)以降に皇學館大学が表装したものであり、購入時は卷子を裁断した一紙物の状態であっ

たという<sup>(12)</sup>。なお、前述したように、皇學館大学では四点の「俣賀文書」の購入を予定していたが、そのうち一点は恵良氏が私費で購入されたため、それが同氏所蔵の「俣賀文書」となっている〔表3〕No 5)。

皇學館大学および恵良氏所蔵の「俣賀文書」の構成は、(A)に該当する文書が一点〔表3〕No 1)、(B)に該当する文書が二点〔表3〕No 2・5)、(C)に該当する文書が一点〔表3〕No 3)、(D)に該当する文書が〇点となる。いずれも南北朝期の軍事関係文書であり、これが両者の「俣賀文書」の特色といえよう。

足利市所蔵の「俣賀文書」は、建武三年(一三三六)五月十三日付足利尊氏軍勢催促状一点のみであり、内容的には(B)に分類される文書となる。本文書は、昭和六十年に足利市が飯島氏から購入したものである<sup>(13)</sup>ので、もとは花園大学所蔵の「俣賀文書」と一緒にあったものとわかる。本文書は、現在額装にされているが、これは購入後、足利市によって表装されたものである。

以上、各所蔵機関ごとの「俣賀文書」の概要を紹介した。これをまとめると、〔表5〕(本稿末尾に掲載)の通りとなる。日本大学と花園大学所蔵の「俣賀文書」は、特に(A)と(D)に関して対照的な構成になっていることが一目瞭然であろう。しかし、花園大学所蔵の「俣賀文書」の大半は、もともと飯島氏が銀座の古美術商から購入したものが、飯島氏は切断された「俣賀文書」のなかから年代の古そうなものを中心に無作為に選んで購入したという<sup>(14)</sup>。したがって、両機関の対照的な「俣賀文書」の構成には、特定の歴史的作為は介在していないことを付言しておく。

## 二 近代表装時「俣賀文書」の復元案

「俣賀文書」原本を調査する過程で、日本大学と花園大学所蔵のものの一部には、後筆のものと見られる墨書の数字が記されていることが確

認できた（【図1】～【図3】参照）。これらの数字が記された時期を特定することは難しいが、これらのなかには算用数字が含まれており、かつ万年筆や鉛筆で記したと思しき数字も混在している。したがって、「侯賀文書」の墨書数字は、近代の成巻時に記された可能性が高いと判断される。

前章で述べたように、「侯賀文書」は昭和四十年代に一紙ずつに解体されて売りに出されたが、それ以前は四巻の卷子装に表装されていた

【図1】 侯賀致家讓状（花園大学情報センター（図書館）所蔵，○部分に「十八」と見える）

といい、花園大学にはその卷子装に使用されていた軸の一つが残されている。<sup>(15)</sup>そこには、「大日本東京麹町区紀尾井町三番地自邸ニ於テ 明治二十年十月調製 表具師川田岩吉」と墨書されているが、これは上島有氏も指摘する通り、「侯賀文書」が明治二十年（一八八七）に東京で四巻の卷子装に表装された事実を示すものと見られる。<sup>(16)</sup>「侯賀文書」の墨書数字は、この表装時に記されたものと見なされよう。

明治二十年に四巻の卷子装にされた「侯賀文書」だったが、昭和四十

【図2】 侯賀致堯讓状（花園大学情報センター（図書館）所蔵，○部分に「二十五」と見える）

年代に一紙ずつに裁断され、分散することになった。現在の各所蔵機関・所蔵者のもとにある「俣賀文書」は、この解体後の状態を表すものに他ならなく、解体前の状態を知ることが不可能に近いといってもよい。しかしながら、「俣賀文書」に記された墨書数字が、明治二十年の表装時に記されたものであるならば、これは解体前の「俣賀文書」の状態を復元するうえでの重要な手がかりになるはずである。そこで本章では、墨書数字の数自体は決して多くないものの、「俣賀文書」に残されたこのわずかな手がかりをもとに、近代表装時の「俣賀文書」の状態復元を試みてみたい。

まず、墨書数字の記載位置に着目してみると、①奥上裏、②端裏、③袖下、④正面裏、の四か所に記されていることが確認できる。点数は、①が十六点（表1）No. 2・3・4・13・15・25・26・30・37・38・40・41・42・44、【表2】No. 19・21、②が九点（表1）No. 21・23・

【図3】 益田藤兼書状（部分、花園大学情報センター（図書館）所蔵、○部分に逆さで「三十五」と見える）

24・27・29・47・62・89、【表2】No. 22、③が二点（表1）No. 2・53、④が一点（表2）No. 18）となる。点数にばらつきが見られるものの、墨書数字の記載位置は四か所あることが知られるので、同じ記載位置を持つ文書が同一の卷子にまとめられていることが想定できる。しかし、①と③が同一の文書に記されている事例がある（表1）No. 2）ことから、この想定は成り立たないことが判明する。このことは、①～③の文書群が内容的にも形式的にもまとまりがないことから明らかである。

次に、記載位置にかかわらず、これらの墨書数字をひとしなみに並べて考えてみたい。ただし、③の袖下に記された墨書数字は文書の表に算用数字で記されており、他の数字と比べると異質であるため、ひとまず捨象することにする<sup>17</sup>。すると、重複する墨書数字は次の五つとなり、それぞれ二点ずつあることがわかる。

- ・「六」…円戒讓状（表1）No. 3）と常陸親王令旨（表1）No. 21）
- ・「十」…石見守護上野頼兼書下写（表1）No. 13）と後村上天皇口宣案（表1）No. 30）
- ・「十一」…円戒讓状（表1）No. 2）と足利尊氏軍勢催促状写（表1）No. 15）
- ・「十八」…大内満弘安堵状（表1）No. 37）と俣賀致家讓状（表2）No. 18）
- ・「十九」…石見守護山名政清書状写（表1）No. 44）と俣賀致家讓状（表2）No. 19）

これらの墨書数字は、「俣賀文書」が明治二十年に表装される際に記されたものと考えられることから、右の重複する数字を持つ文書はそれぞれ違う卷子にまとめられていたことになる。そこで、これら五つの重複数字文書の内容をもとに、「俣賀文書」を、（A）俣賀氏内部で作成された文書（讓状・軍忠状等）、（B）將軍・守護・大将等の発給文書（軍勢催促状・感状・挙状等）、（C）王家（南朝）の発給文書（口宣案・令



旨、(D) 戦国期に保賀氏の主人となった益田氏の発給文書、の四つに分類してみたい。そしてそのうえで、墨書数字が記された文書二十六点を内容に即して、(A) ～ (D) ごとに数字順に仕分けしてみると、次のような結果を得られる(文書名の前に記した数字は、それぞれの文書に記された墨書数字を示す)。

- ・(A) …「六」円戒讓状〔表1〕No.3・「七」保賀地頭空昭和与状〔表1〕No.4・「十二」円戒讓状〔表1〕No.2・「十八」保賀致家讓状〔表2〕No.18・「十九」保賀致家讓状〔表2〕No.19・「二十五」保賀致家讓状〔表2〕No.21
  - ・(B) …「十」石見守護上野頼兼書下写〔表1〕No.13・「十一」足利尊氏軍勢催促状写〔表1〕No.15・「十三」足利義詮感状〔表1〕No.25・「十四」吉見範直感状〔表1〕No.26・「十五」足利義詮感状〔表1〕No.27・「十七」荒川詮頼感状〔表1〕No.29・「十八」大内満弘安堵状〔表1〕No.37・「十九」石見守護山名政清書状写〔表1〕No.44・「二十」石見守護山名熙貴安堵状〔表1〕No.38・「二十二」石見守護代山名清宗打渡状〔表1〕No.40・「二十三」石見守護代山名清宗打渡状案〔表1〕No.41・「三十八」吉見家貞書状〔表1〕No.42
  - ・(C) …「六」常陸親王令旨〔表1〕No.21・「八」常陸親王令旨〔表1〕No.23・「九」常陸親王令旨〔表1〕No.24・「十」後村上天皇口宣案〔表1〕No.30
  - ・(D) …「二十六」益田宗兼書状〔表1〕No.47・「二十九」益田徳祐書状〔表1〕No.62・「三十五」益田藤兼書状〔表2〕No.22・「五十五」全屋書状〔表1〕No.89
- これを見ると、(A) ～ (D) のなかで数字が重複しないことが確認できる。また、それぞれの文書は、(A) ～ (D) のなかでおおよそ時

系列順に並んでいることも確認できる。前章で述べたように、現在、墨書数字が確認できない文書もすべて、(A) ～ (D) のいずれかに分類することができる。以上のことから、ひとまず、近代において「保賀文書」は、(A) 保賀氏内部で作成された文書、(B) 將軍・守護・大将等の発給文書、(C) 王家(南朝)の発給文書、(D) 益田氏の発給文書、という内容に即した四巻の卷子装に表装され、その作業時に墨書数字が記されたものと考えておきたい。左の【図4】は、「保賀文書」が近代に成巻されて以降、現在の各所蔵機関・所蔵者のもとに収められるまでの経緯をまとめたものである。

#### 原「保賀文書」

↓ 中世文書を抽出し、四巻の卷子装に表装(明治20年)

#### 近代「保賀文書」の成立

- (A) 保賀氏内部で作成された文書
- (B) 將軍・守護・大将等の発給文書
- (C) 王家(南朝)の発給文書
- (D) 益田氏の発給文書

↓ 銀座の古美術商に売却後、一紙ずつに裁断される(昭和40年代)

#### 下記の四者が購入し、その後、(2)と(3)は転売される

- (1) 飯島一郎氏(20点)
- (2) 神奈川県鎌倉市在住の個人(3点)→のち飯島氏が購入
- (3) 島根県浜田市出身の個人(94点)→のち弘文荘が購入
- (4) 思文閣(4点)

↓

#### 下記の三者のもとを経て、現在の所蔵機関・所蔵者のもとへ収められる

- (1) 飯島氏所蔵「保賀文書」→花園大学・足利市所蔵「保賀文書」
- (2) 弘文荘所蔵「保賀文書」→日本大学所蔵「保賀文書」
- (3) 思文閣所蔵「保賀文書」→皇學館大学・恵良宏氏所蔵「保賀文書」

【図4】「保賀文書」の近代成巻以降の分散経緯

「俣賀文書」に残されたわずかな手がかりをもとに、近代表装時の状態復元を試みた。この復元案が妥当なものだとすると、新たな検討課題が浮かび上がってくる。すなわち、四巻にまとめられていた「俣賀文書」が昭和四十年代に解体されて売りに出されたとき、その総数はおおよそ一五〇点ほどであったという<sup>18)</sup>。現在、確認されている「俣賀文書」の総数は一二一点であることから、三十点ほどが紛失していることになるものの、大部分が現存していることになる。これらはすべて中世文書であることを踏まえると、四巻にまとめられた「俣賀文書」とは、近世を益田氏の家臣として過ごした俣賀氏が家伝文書群のなかから意図的に中世文書のみを抽出し、何らかの目的をもって右の四つの内容に整理したものであったと理解できる。近代の俣賀氏は、いったいいかなる目的をもって「俣賀文書」を作成したのだろうか。「俣賀文書」作成の歴史的背景について、当時の士族俣賀氏が直面していた状況と、整理された「俣賀文書」の内容の意味を踏まえながら検討することが、次の課題として浮上してくるのである。

また、このように「俣賀文書」が近代のある時期に、ある意図をもって選択・整理された文書群であるという事実を鑑みると、ほかの多くの家伝文書群も同様の選択・整理を経て今日の姿として伝えられたものであることに気がつく。各家伝文書群を伝えた家の性格を踏まえつつ、それぞれの家においてどのような文書が選択され、いかなる形態に整理されたのかを検討することは、家伝文書群を史料学的に追究していくうえで重要な課題となるだろう。<sup>19)</sup>「俣賀文書」は、その好個の検討素材にもなりうることを指摘して、ひとまず擱筆したい。

# 註

- (1) 本稿では、現在、日本大学図書館・花園大学情報センター(図書館)・皇學館大学文学部国史学科・足利市民文化財団・恵良宏氏のもとに所蔵されている俣賀氏の家伝文書群を一括して「俣賀文書」と総称する。
- (2) 「花園大学情報センター(図書館) 所蔵俣賀家文書」嘉禎二年十二月十五日付將軍家政所下文(中世益田・益田氏関係史料集「一二号」)。
- (3) 俣賀氏は、致義の次代で、俣賀上村を相続した致直の系統(上俣賀氏)と俣賀下村を相続した円戒の系統(下俣賀氏)とに分かれる。残念ながら、「俣賀文書」には俣賀氏の系図がないため、その系譜関係は文書の内容から明らかにしなければならぬ。本研究報告所収の渡邊浩貴「石見国長野莊俣賀氏の本拠景観と生業・紛争」は、「俣賀文書」を丹念に検討することで鎌倉期の俣賀氏の系譜関係を明らかにしているもので、参照されたい。
- (4) 「中世益田・益田氏関係史料集」(益田市、二〇一六年)に、「俣賀文書」全点の翻刻が掲載されている。
- (5) 中世の西石見地域の研究を進めるうえでの最重要史料となる、東京大学史料編纂所蔵益田家文書(什書分)の書誌情報については、『大規模武家文書群による中・近世史料学の統合的研究』(研究代表者・久留島典子、平成十五年度・平成十九年度科学研究費補助金 基盤研究(A) 研究成果報告書、二〇〇八年)において全容が公表されている。
- (6) 原本調査の日程・調査者は、次の通りである。  
①二〇一六年九月十五日・二十三日、荒木和憲・田中大喜・渡邊浩貴の三名で日本大学図書館所蔵「石見国俣賀文書」を調査。  
②二〇一六年十一月十七日、荒木・田中・渡邊の三名で皇學館大学文学部国史学科所蔵「内田俣賀文書」を調査。  
③二〇一六年十一月十八日、荒木・田中・渡邊の三名で花園大学情報センター(図書館)所蔵「俣賀家文書」を調査。  
④二〇一六年十一月二十八日、田中が恵良宏氏所蔵の観応元年(一二三〇)十二月七日付高師泰感状を調査。  
⑤二〇一七年一月十八日、荒木・田中・渡邊の三名で足利市民文化財団所蔵の建武三年(一二三六)五月十三日付足利尊氏軍勢催促状を調査。
- (7) 「俣賀文書」の売却から現在の所蔵機関・所蔵者のもとに収められるまでの経緯については、上島有「ある文書の流転の旅」『古文書研究』五五号、二〇〇二年)に詳しく紹介されている。後掲【図4】も、これに依拠して作成した。
- (8) 日本大学では鈴木国弘編『日本大学総合図書館所蔵俣賀文書』(鈴木研究室、

一九八六年)、花園大学では花園大学情報センター(図書館)編『展示シリーズ2「保賀家文書」』(花園大学情報センター(図書館)、一九九五年)、皇學館大学では岡野友彦・皇學館大学文学部編『皇學館大学所蔵の中世文書』(研究代表者・岡野友彦、平成二十六年度・平成二十八年科学費助成事業 基盤研究成果報告書、二〇一七年)を刊行し、それぞれ所蔵する「保賀文書」の内容を公開している。これらのうち、花園大学と皇學館大学の刊行物では、写真画像も掲載されている。また、花園大学情報センター(図書館)では、ホームページ上で所蔵の「保賀家文書」の画像を公開している。

(9) 恵良宏氏所蔵文書は、入手経緯に鑑みて、皇學館大学文学部国史学科所蔵のものとまとめて掲載している。

(10) 【表1】No.5の発給者である藤原兼氏について、益田氏の人物であることを示す史料の根拠はないが、益田氏の本姓である藤原姓を名乗り、かつ益田氏の通字「兼」を名乗っていることから、益田氏の人物と考えておく。

(11) この文書は、前掲『皇學館大学所蔵の中世文書』に翻刻が掲載されている。

(12) この点は、上島有前掲論文の記述と符合している。

(13) この点は、上島有前掲論文でも紹介されている。

(14) 上島有前掲論文参照。

(15) 上島有前掲論文によると、この軸は飯島氏が銀座の古美術商から「保賀文書」の購入時に譲り受けたものであるという。飯島氏は、この軸を用いて徳治二年(二三〇七)四月二日付六波羅下知状【表2】No.4を卷子装に表装し、氏がこの文書を含む購入分の「保賀文書」を花園大学に寄贈した際、軸も同大学に入ったようである。

(16) 重田麻紀氏のご教示によると、明治四十三年(一九一〇)に作成された、関東在住の旧益田家臣団の集まりと見られる「笠松会」という団体の会員名簿のなかに、「保賀致正 東京都豊多摩郡中野町大字中野 陸軍主計監」という記載が確認できるといふ。この人物が、「保賀文書」を四巻の卷子装に表装させた者かは明らかにできないが、明治期に保賀氏の子孫が東京に在住していたことは確実であることがわかる。なお、同じく重田氏によると、この名簿は、東京大学史料編纂所所蔵の益田家文書(寄託分)のなかの「笠松会記念写真」という史料に付属していたものという。

(17) 【表1】No.42の文書に記された墨書数字も算用数字であるが、大多数の数字と同様に文書の裏に記されていることを重視して、考察の対象に含めることにする。

(18) 上島有前掲論文参照。

(19) 前嶋敏「『三浦和田氏文書』の形成」(矢田俊文・新潟県立歴史博物館編『越後

文書宝翰集 三浦和田氏文書I』新潟県立歴史博物館、二〇一八年)も、同様の問題関心から「三浦和田氏文書」の形成過程を追究している。

【付記】 本稿を成すにあたり、花園大学情報センター(図書館)から、図版写真の掲載許可をいただいた。記して謝意を表したい。

(国立歴史民俗博物館研究部)

(二〇一七年二月二〇日受付、二〇一八年六月四日審査終了)



【表1】 日本大学図書館所蔵「石見国保賀文書」目録

No.	日大 番号	益田 番号	現形態 整理番号	文書名	年月日	西暦	差出	印・花押	宛所	形態	法量 (縦×横)cm	紙数	料紙	折筋	備 考
1				桐箱							36.0×23.6×16.0 (縦×横×高さ)				6巻の卷子装。上下2段の桐箱で、3巻ずつ収納されている。箱の表に押紙「石見国保賀氏文書」あり。
2	1	51	1-1	円戒譲状	正和1年 6月1日	1312	円戒	花押	藤原市熊丸	堅紙	31.7×44.6	1	楮紙	16	卷子見返しに付箋「55.314 791075」あり。奥上裏に番号「十一」、袖下表に番号「1」(鉛筆書か)あり。
3	2	52	1-2	円戒譲状	正和1年 6月1日	1312	円戒	花押	春若丸	堅紙	31.0×39.2	1	楮紙	15	奥上裏に番号「六」あり。
4	3	53	1-3	保賀地頭空昭和与状	正和2年 9月16日	1313	空昭	花押	なし	堅紙	31.6×44.3	1	楮紙	17	奥上裏に番号「七」あり。
5	4	76	1-4	藤原兼氏書状	(元徳4年) 5月16日	1332	藤原兼氏	花押	保賀地頭	堅紙	31.0×32.3	1	楮紙	13	本文・花押同筆。本文5行目「急速」は「急速」。年号異筆。
6	5	86	1-5	了忍召文	建武2年 5月9日	1335	沙弥了忍	花押	保賀又三郎	堅紙	29.7×33.1	1	楮紙	16	本文3行目「雑訴」の「訴」を書き直している。
7	6	91	1-6	足利尊氏袖判御教書	建武3年 2月13日	1336	足利尊氏	花押	内田又三郎	小切紙	15.0×17.9	1	楮紙	10	本文3行目「発向」の「発」を書き直している。
8	7	111	1-7	石見守護上野頼兼軍勢催促状	建武4年 7月4日	1337	上野頼兼	花押	保賀掃部左衛門尉	堅紙	28.1×38.4	1	楮紙	12	奥上に墨引あり。宛所「保賀」の「保」を書き直している。
9	8	367	1-8	大内満世書状	(年未詳) 9月27日	—	大内満世	花押	保賀左衛門尉	堅紙	30.3×37.0	1	楮紙	17	全文一筆。目筆カ。宛所「保賀左衛門尉殿」は「保賀左衛門尉とのへ」。
10	9	131	1-9	石見守護上野頼兼安堵状	暦応3年 3月29日	1340	上野頼兼	花押	内田掃部左衛門尉	堅紙	26.4×33.3	1	楮紙	16	本文1行目「須子」は異筆。「保賀」を摺消したカ。
11	10	132	1-10	足利直義感状	暦応3年 8月1日	1340	足利直義	花押	内田掃部左衛門尉	堅紙	30.4×43.0	1	楮紙	13	
12	11	134	1-11	石見守護上野頼兼遵行状	暦応3年 9月17日	1340	上野頼兼	花押	保賀熊若丸	堅紙	30.9×40.2	1	楮紙	12	
13	12	147	1-12	石見守護上野頼兼書下写	康永3年 2月25日	1344	上野頼兼	花押影	大森左衛門二郎	堅紙	27.5×31.9	1	楮紙	11	奥上裏に番号「十」あり。奥に横幅1.5cm分の足し紙あり。
14	13	148	1-13	益田兼世書状	(年未詳) 11月13日	—	益田兼世	花押	松田将監	堅紙	31.0×37.9	1	楮紙	13	全文一筆。自筆カ。卷子見返し末に「月明荘」の朱印あり。
15	14	201	2-1	足利尊氏軍勢催促状写	観応2年 8月6日	1351	足利尊氏	花押影	内田左衛門三郎	小切紙	16.2×11.6	1	斐紙	不明	卷子見返しに付箋「55.314 791076」あり。奥上裏に番号「十一」あり。押紙「尊氏」は本来花押左にあり。正文の可能性が高い。
16	15	202	2-2	常陸親王令旨写	正平6年 8月10日	1351	右兵衛佐	花押影	内田左衛門三郎	小切紙	10.4×12.0	1	斐紙	不明	正文の可能性が高い。
17	16	203	2-3	常陸親王令旨写	正平6年 8月10日	1351	右兵衛佐	花押影	伊藤次郎六郎	小切紙	10.7×12.6	1	斐紙	不明	正文の可能性が高い。
18	17	204	2-4	治部権少輔軍勢催促状写	正平6年 8月10日	1351	治部権少輔	花押影	内田左衛門三郎	小切紙	12.5×12.7	1	楮紙(打紙)	不明	正文の可能性が高い。

No.	日大 番号	益田 番号	現形態 整理番号	文書名	年月日	西暦	差出	印・花押	宛所	形態	法量 (縦×横)cm	紙数	料紙	折筋	備考
19	18	205	2-5	治部権少輔軍勢 催促状写	正平6年 8月10日	1351	治部権少輔	花押影	伊藤次郎六郎	小切紙	128×9.1	1	楮紙 (打紙)	不明	正文の可能性が高い。
20	19	208	2-6	足利尊氏軍勢催 使状写	観応2年 8月16日	1351	足利尊氏	花押影	内田左衛門 三郎	小切紙	15.7×10.5	1	斐紙	不明	日付は「十六」か「十二」。押紙「尊氏」は本来花押左にあり。正文の可能性が高い。
21	20	209	2-7	常陸親王令旨	正平6年 9月14日	1351	侍従	花押	伊賀左衛門 三郎	小切紙	15.1×20.8	1	楮紙	不明	端裏に番号「六」あり。
22	21	210	2-8	常陸親王令旨	正平6年 9月15日	1351	侍従	花押	藤原景光	小切紙	15.9×20.0	1	楮紙	不明	
23	22	211	2-9	常陸親王令旨	正平6年 9月15日	1351	侍従	花押	伊藤次郎六郎	小切紙	15.0×20.8	1	楮紙	不明	端裏に番号「八ヵ」あり。
24	23	212	2-10	常陸親王令旨	正平6年 10月8日	1351	右兵衛佐	花押	伊賀兵庫允	小切紙	14.1×20.5	1	楮紙	不明	端裏に番号「九」あり。
25	24	224	2-11	足利義詮感状	観応3年 8月12日	1352	足利義詮	花押	内田左衛門 三郎	小切紙	15.5×11.8	1	斐紙	不明	奥上裏に番号「十三」あり。
26	25	230	2-12	吉見範直感状	文和2年 1月10日	1353	吉見範直	花押	伊賀兵庫助	小切紙	15.1×16.3	1	楮紙	不明	奥上裏に番号「十四」あり。
27	26	232	2-13	足利義詮感状	文和2年 4月22日	1353	足利義詮	花押	内田左衛門 三郎	小切紙	15.8×12.0	1	斐紙	不明	端裏に番号「十五」あり。花押左上に押紙「直義」あり。
28	27	238	2-14	荒川詮頼軍勢催 使状	文和3年 2月22日	1353	荒川詮頼	花押	内田左衛門 三郎	小切紙	15.4×9.7	1	斐紙	不明	
29	28	239	2-15	荒川詮頼感状	文和3年 4月17日	1353	荒川詮頼	花押	内田伊賀左 衛門三郎	小切紙	15.5×16.1	1	斐紙	不明	端裏に番号「十七」あり。
30	29	260	2-16	後村上天皇口宣 案	正平17年 1月26日	1362	源具氏	なし	藤原致弘	小切紙	16.2×20.1	1	斐紙	不明	奥上裏に番号「十」あり。袖上に押紙「口宣案」あり。
31	30	270	2-17	守護使長経打渡 状	貞治4年 4月28日	1365	某長経	花押	内田左衛門 三郎	堅紙	26.3×33.0	1	楮紙	不明	本文2行目「俣賀」が「俣賀」になっている。
32	31	271	2-18	守護使貞遠打渡 状	貞治4年 4月29日	1365	某貞遠	花押	内田左衛門 三郎	堅紙	26.9×34.2	1	楮紙	17	本文2行目「俣賀」が「俣賀」になっている。卷子見返しに付箋「55.3.14 791077」あり。
33	32	272	3-1	俣賀致弘議状	貞治4年 8月10日	1365	俣賀致弘	花押	道祖徳丸	堅紙	31.6×40.1	1	楮紙	15	本文2行目「俣賀」が「俣賀」になっている。
34	33	273	3-2	守護使・上使連 署打渡状	貞治5年 8月19日	1366	某忠基・道源	花押	内田左衛門 三郎	堅紙	26.1×31.1	1	楮紙	14	本文2行目「俣賀」が「俣賀」になっている。
35	34	289	3-3	室町幕府御教書	永和2年 閏7月8日	1376	細川頼之	花押	内田俣賀新 三郎	小切紙	19.3×26.0	1	斐紙	13	花押右に押紙「細川頼之」あり。
36	35	293	3-4	大内義弘安堵状	康暦1年 7月26日	1379	大内義弘	花押	内田新三郎	堅紙	①本紙29.9×44.3。 ②もと裏紙29.7×4.7。	2	楮紙	17	袖にもと裏紙を貼り継ぐ。もと裏紙にウハ書「内田新三郎殿 散位義弘」あり。

No	日大 番号	益田 番号	現形態 整理番号	文書名	年月日	西暦	差出	印・花押	宛所	形態	法量 (縦×横)cm	紙数	料紙	折筋	備 考
37	36	304	3－5	大内満弘安堵状	至徳2年 7月11日	1385	大内満弘	花押	俣賀新三郎	縦紙	25.6 × 34.1	1	楮紙	不明	奥上裏に番号「十次(八カ)」あり。
38	37	378	3－6	石見守護山名熙 貴安堵状	嘉吉1年 4月22日	1441	山名熙貴	花押	俣賀万歳丸	縦紙	28.8 × 38.8	1	楮紙	不明	奥上裏に番号「二十」あり。折筋不明だが真ん中に大きな縦の折筋あり。
39	38	—	3－7	石見守護山名熙 貴安堵状案	嘉吉1年 4月22日	1441	山名熙貴	なし	俣賀之万歳 丸	縦紙	26.7 × 37.5	1	楮紙	17	奥表に異筆「中書御判案」あり(もと端裏書)。
40	39	379	3－8	石見守護代山名 清宗打渡状	嘉吉1年 4月26日	1441	山名清宗	花押	俣賀万歳丸	縦紙	28.6 × 39.6	1	楮紙	不明	奥上裏に番号「二十二」あり。
41	40	—	3－9	石見守護代山名 清宗打渡状案	嘉吉1年 4月26日	1441	山名清宗	なし	俣賀万歳丸	縦紙	27.3 × 38.0	1	楮紙	不明	奥表に異筆「栖掃御判案」あり(もと端裏書)。奥上裏に番号「二十三」あり。
42	41	356	3－10	吉見家貞書状	(年未詳) 6月8日	—	吉見家貞	花押	又香	縦紙	28.6 × 42.9	1	楮紙	不明	奥上裏に番号「38」あり。
43	42	389	3－11	益田兼堯加冠状	文安6年 2月25日	1449	益田兼堯	花押	俣賀孫三郎	縦紙	29.4 × 37.0	1	楮紙	不明	
44	43	464	3－12	石見守護山名政 清書状写	(年未詳) 8月28日	—	山名政清	花押影	俣賀左近将 監	切紙	16.0 × 37.5	1	楮紙	不明	奥上裏に番号「十九」あり。
45	44	465	3－13	石見守護代カ山 名カ義宗書状	(年未詳) 9月28日	—	山名カ義宗	花押	俣賀左近将 監	切紙	16.6 × 34.3	1	楮紙	不明	花押異筆。卷子見返し末に「月明荘」の朱印あり。
46	45	494	4－1	益田宗兼書状	(年未詳) 5月25日	—	益田宗兼	花押	なし	縦紙	①本紙 27.8 × 33.6。 ②もと裏紙1紙目27.8 × 14.3。 ③もと裏紙2紙目27.8 × 7.3。	3	楮紙	不明	卷子見返しに付箋「55.314 791078」あり。本紙の前後にもと裏紙を貼り継ぐ。「何様近日」以下はもと裏紙1紙目に記載。もと裏紙2紙目に切封墨引とウハ書「俣賀左近将監殿 次郎宗兼」あり。
47	46	542	4－2	益田宗兼書状	(年未詳) 3月13日	—	益田宗兼	花押	俣賀孫三郎・ 俣賀但馬入 道	切継紙	①本紙1紙目 13.8 × 38.1。 ②本紙2紙目 13.8 × 9.6。	2	楮紙	不明	端裏に番号「二十六」あり。「不能一二候」以下は2紙目に記載。もと折紙カ。
48	47	489	4－3	益田宗兼加冠状	永正1年 12月19日	1504	益田宗兼	花押	俣賀孫三郎	縦紙	28.6 × 34.3	1	楮紙	12	成巻の跡あり。
49	48	495	4－4	益田宗兼書状	(年未詳) 12月26日	—	益田宗兼	花押	俣賀	縦紙	①本紙 29.6 × 40.7。 ②もと裏紙 29.6 × 5.7。	2	楮紙	不明	袖にもと裏紙を貼り継ぐ。本紙奥に横幅2.4cm、もと裏紙右側に横幅2.8cm分の足し紙あり。もと裏紙に切封墨引とウハ書「俣賀殿進之候 ちふの少輔宗兼」あり。
50	49	501	4－5	益田宗兼書状	永正4年 11月15日	1507	益田宗兼	花押	俣賀孫三郎	縦紙	28.8 × 35.6	1	楮紙	16	
51	50	493	4－6	益田宗兼書状	(年未詳) 3月13日	—	益田宗兼	花押	なし	縦紙	①本紙 29.2 × 36.4。 ②もと裏紙 29.2 × 6.2。	2	楮紙	不明	袖にもと裏紙を貼り継ぐ。もと裏紙に切封墨引とウハ書「俣賀殿進之候 まこ次郎宗兼」あり。
52	51	545	4－7	益田宗兼書状	(年未詳) 8月18日	—	益田宗兼	花押	俣賀孫三郎	切紙	14.0 × 39.5	1	楮紙	不明	

No.	日大 番号	益田 番号	現形態 整理番号	文書名	年月日	西暦	差出	印・花押	宛所	形態	法量 (縦×横) cm	紙数	料紙	折筋	備 考
53	52	492	4-8	益田宗兼書状	(年未詳) 3月9日	—	益田宗兼	花押	なし	縦紙	①本紙28.4×34.8。 ②もと裏紙1紙目28.4×11.7。 ③もと裏紙2紙目28.4×5.8。	3	楮紙	不明	袖下に番号「50」(鉛筆書か)あり。 本紙の前後にもと裏紙を貼り継ぐ。 「御養生肝要候」以下はもと裏紙1紙目に記載。もと裏紙2紙目に切封墨引とウハ書「俣賀殿進之候 まこ次郎宗兼」あり。本文9行目末「参以」を最初に記し、この上に「期」を重ねて記したか。
54	53	531	4-9	益田尹兼感状	(永正15年) 4月26日	1518	益田尹兼	花押	俣賀孫三郎	切紙	12.9×38.7	1	楮紙	不明	差出の又次郎は益田尹兼。年号異筆。
55	54	540	4-10	益田宗兼感状	永正15年 6月26日	1518	益田宗兼	花押	俣賀孫三郎	切紙	14.2×38.1	1	楮紙	不明	年号同筆。
56	55	539	4-11	益田宗兼感状	永正15年 6月26日	1518	益田宗兼	花押	俣賀又六	切紙	14.4×37.6	1	楮紙	不明	年号同筆。
57	56	555	4-12	全田書状	(年未詳) 3月2日	—	益田貞兼	花押	俣賀	切紙	14.4×31.7	1	楮紙	不明	端裏に切封墨引あり。
58	57	556	4-13	全田書状	(年未詳) 3月21日	—	益田貞兼	花押	俣賀	切紙	13.9×28.9	1	楮紙	不明	
59	58	557	4-14	益田宗兼書状	(大永8年) 7月1日	1528	益田宗兼	花押	俣賀	縦紙	28.2×38.3	1	楮紙	11	年号異筆。
60	59	567	4-15	益田宗兼感状	天文3年2 月2日	1534	益田宗兼	花押	俣賀孫三郎	切紙	16.2×44.0	1	楮紙	15	年号同筆。
61	60	568	4-16	益田宗兼感状	天文3年2 月2日	1534	益田宗兼	花押	俣賀孫三郎	切紙	16.0×42.3	1	楮紙	16	年号同筆。
62	61	589	4-17	益田徳祐書状	(天文14年) 9月4日	1545	益田徳祐	花押	俣賀将監	切紙	18.1×43.8	1	楮紙	不明	端裏に番号「二十九」あり。年号異筆。 卷子見返し末に「月明荘」の朱印あり。
63	62	612	5-1	益田藤兼感状	天文20年 10月12日	1551	益田藤兼	花押	俣賀左近将監	切紙	16.0×35.3	1	楮紙	11	卷子見返しに付箋「55.314 791079」あり。もと折紙か。年号同筆。
64	63	614	5-2	益田藤兼書状	(天文20年) 10月24日	1551	益田藤兼	花押	俣賀	縦紙	①本紙27.8×44.7。 ②もと裏紙27.8×4.5。	2	楮紙	不明	袖にもと裏紙を貼り継ぐ。もと裏紙に切封墨引とウハ書「俣賀殿進之候藤兼」あり。年号異筆。
65	64	626	5-3	益田藤兼感状	天文23年 4月21日	1554	益田藤兼	花押	俣賀孫十郎	切紙	①本紙1紙目14.2×31.7。 ②本紙2紙目14.2×4.9。	2	楮紙	不明	宛所は2紙目に記載。もと折紙か。年号同筆。
66	65	627	5-4	益田藤兼感状	天文23年 4月21日	1554	益田藤兼	花押	俣賀新蔵人	切紙	14.3×41.0	1	楮紙	不明	宛所は年月日から折3つ分離れる。もと折紙か。年号同筆。
67	66	632	5-5	益田藤兼感状	天文23年 6月28日	1554	益田藤兼	花押	俣賀々藤左衛門尉	切紙	14.7×39.6	1	楮紙	不明	宛所は年月日から折3つ分離れる。もと折紙か。年号同筆。
68	67	633	5-6	益田藤兼感状	天文23年 6月28日	1554	益田藤兼	花押	俣賀次郎右衛門尉	切紙	14.5×41.0	1	楮紙	不明	もと折紙か。年号同筆。
69	68	636	5-7	益田藤兼感状	天文23年 8月4日	1554	益田藤兼	花押	俣賀新蔵人	切紙	14.6×40.2	1	楮紙	不明	もと折紙か。年号同筆。



No	日大 番号	益田 番号	現形態 整理番号	文書名	年月日	西暦	差出	印・花押	宛所	形態	法量 (縦×横)cm	紙数	料紙	折筋	備 考
70	69	637	5－8	益田藤兼感状	天文23年 8月6日	1554	益田藤兼	花押	俣賀弥藤六	切紙	14.6×43.2	1	楮紙	不明	もと折紙カ。年号同筆。
71	70	639	5－9	益田藤兼感状	天文23年 8月28日	1554	益田藤兼	花押	俣賀新藏人	切紙	12.9×35.2	1	楮紙	不明	もと折紙カ。年号同筆。
72	71	644	5－10	益田藤兼感状	天文24年 2月13日	1555	益田藤兼	花押	俣賀新藏人	切紙	12.7×37.8	1	楮紙	不明	もと折紙カ。年号同筆。
73	72	654	5－11	益田藤兼感状	(弘治1年) 11月3日	1555	益田藤兼	花押	俣賀	豎紙	28.0×31.4	1	楮紙	不明	年号異筆。
74	73	812	5－12	益田藤兼書状	(年未詳) 11月19日	—	益田藤兼	花押	俣賀	豎紙	27.4×35.8	1	楮紙	不明	
75	74	668	5－13	益田藤兼感状	弘治2年 7月4日	1556	益田藤兼	花押	俣賀賀藤左 衛門尉	切紙	12.7×36.1	1	楮紙	不明	もと折紙カ。年号同筆。
76	75	669	5－14	益田藤兼感状	弘治2年 7月4日	1556	益田藤兼	花押	俣賀新藏人	切紙	22.5×36.2	1	楮紙	不明	もと折紙カ。年号同筆。
77	76	670	5－15	益田藤兼感状	弘治2年 7月4日	1556	益田藤兼	花押	俣賀新藏人	切紙	12.9×34.1	1	楮紙	不明	もと折紙カ。年号同筆。
78	77	671	5－16	益田藤兼感状	弘治2年 7月4日	1556	益田藤兼	花押	俣賀惣兵衛 尉	切紙	12.9×37.5	1	楮紙	不明	もと折紙カ。年号同筆。卷子見返し 末に「月明荘」の朱印あり。
79	78	672	6－1	益田藤兼感状	弘治2年 7月4日	1556	益田藤兼	花押	俣賀弥藤六	切紙	12.6×39.0	1	楮紙	不明	卷子見返しに付箋「55.314 791080」 あり。もと折紙カ。年号同筆。
80	79	673	6－2	益田藤兼感状	弘治2年 7月4日	1556	益田藤兼	花押	俣賀次郎右 衛門尉	切紙	12.4×39.0	1	楮紙	不明	もと折紙カ。年号同筆。
81	80	679	6－3	益田藤兼感状	(弘治2年) 10月11日	1556	益田藤兼	花押	俣賀新藏人	切紙	13.0×40.7	1	楮紙	不明	もと折紙カ。年号異筆。
82	81	686	6－4	益田藤兼書状	(弘治3年) 4月26日	1557	益田藤兼	花押	俣賀	切紙	16.5×34.9	1	楮紙	不明	もと折紙カ。年号異筆。
83	82	802	6－5	益田藤兼書状	(年未詳) 6月29日	—	益田藤兼	花押	俣賀新藏人	切紙	15.9×34.1	1	楮紙	不明	
84	83	805	6－6	益田藤兼書状	(年未詳) 7月25日	—	益田藤兼	花押	俣賀新藏人	切紙	15.4×35.4	1	楮紙	不明	端裏に切封墨引あり。
85	84	806	6－7	益田藤兼書状	(年未詳) 8月8日	—	益田藤兼	花押	俣賀新藏人	切紙	15.3×34.1	1	楮紙	不明	花押の墨は別。
86	85	807	6－8	益田藤兼書状	(年未詳) 8月14日	—	益田藤兼	花押	俣賀新藏人	切紙	17.0×44.3	1	楮紙	不明	
87	86	808	6－9	益田藤兼書状	(年未詳) 8月27日	—	益田藤兼	花押	俣賀新藏人	切紙	16.4×36.9	1	楮紙	不明	端裏に切封墨引あり。
88	87	728	6－10	全書書状	(年未詳) 6月29日	—	益田尹兼	花押	俣賀	切紙	12.7×30.1	1	楮紙	不明	
89	88	701	6－11	全書書状	(永禄2年) 8月22日	1559	益田尹兼	花押	俣賀新藏人	切紙	12.7×35.5	1	楮紙	不明	端裏に番号「五十五」あり。端裏に 切封墨引あり。追而書「大塚」の左 に墨引あり。年号異筆。

No	日大 番号	益田 番号	現形態 整理番号	文書名	年月日	西暦	差出	印・花押	宛所	形態	法量 (縦×横) cm	紙数	料紙	折筋	備考
90	89	702	6－12	益田藤兼書状	(永禄2年) 9月14日	1559	益田藤兼	花押	俣賀新藏人	切紙	16.1 × 35.2	1	楮紙	不明	端裏に切封墨引あり。年号異筆。
91	90	703	6－13	益田藤兼書状	(永禄2年) 9月14日	1559	益田藤兼	花押	俣賀出羽守	切紙	16.5 × 34.1	1	楮紙	不明	端裏に切封墨引あり。年号異筆。
92	91	663	6－14	益田藤兼書状	(年未詳) 6月16日	—	益田藤兼	花押	俣賀	縦紙	①本紙28.3 × 38.4。 ②もと裏紙28.3 × 6.8。	2	楮紙	不明	袖にもと裏紙を貼り継ぐ。もと裏紙に切封墨引とウハ書「俣賀殿進之候えもんの佐藤兼」あり。
93	92	705	6－15	益田藤兼書状	(永禄3年) 6月18日	1560	益田藤兼	花押	俣賀新藏人・俣賀出羽守	切紙	15.4 × 39.4	1	楮紙	不明	端裏に切封墨引あり。年号異筆。
94	93	676	6－16	益田藤兼書状	(年未詳) 7月19日	—	益田藤兼	花押	俣賀	縦紙	①本紙28.2 × 35.4。 ②もと裏紙28.2 × 6.5。	2	楮紙	不明	袖にもと裏紙を貼り継ぐ。もと裏紙に切封墨引とウハ書「俣賀殿進之候えもんの佐藤兼」あり。
95	94	731	6－17	益田藤兼書状	(永禄9年) 3月16日	1566	益田藤兼	花押	俣賀新藏人	縦紙	27.4 × 42.7	1	楮紙	不明	年号異筆。卷子見返し末に「月明荘」の朱印あり。

- 註) 1. 日大番号は『日本大学総合図書館所蔵俣賀文書』のもの。益田番号は『中世益田・益田氏関係史料集』のもの。  
2. 形態整理番号は卷子番号と各卷子の中の文書番号を示す。  
3. 文書名は『中世益田・益田氏関係史料集』に従う。  
4. 差出は比定可能な場合は実名で、不可能な場合は史料上の表記で示す。  
5. 宛所は史料上の表記で示す。  
6. ( ) で括られた年号は異筆で記された年号を示す。

【表2】花園大学情報センター(図書館)所蔵「俣賀家文書」目録

No	刊本 番号	文書名	年月日	西暦	差出	印・花押	宛所	形態	法量 (縦×横) cm	紙数	料紙	折筋	備考
1	12	將軍家政所下文	嘉禎2年 12月15日	1236	二階堂行綱・北条時房・北条泰時・内舍人清原・左近將曹菅野	花押(行綱・時房・泰時・清原)	弥益丸	縦紙	31.5 × 48.6	1	楮紙	不明	二階堂行綱の花押は青墨。No.4以外はすべて一紙物。
2	13	六波羅施行状	嘉禎4年 10月11日	1238	北条重時・北条時盛	花押	なし	縦紙	30.3 × 46.2	1	楮紙	不明	
3	35	六波羅施行状	永仁4年 4月16日	1296	北条盛房・北条久時	花押	なし	縦紙	32.0 × 46.4	1	楮紙	不明	
4	43	六波羅下知状	徳治2年 4月2日	1307	北条時範・金沢貞顕	花押	なし	縦紙	①本紙1紙目31.6 × 47.5。 ②本紙2紙目31.6 × 52.6。	2	楮紙	不明	卷子装。本文14行目「之処相語」以下は2紙目に記載。紙継目裏花押は貞顕のものか。軸長さ41.2cm, 軸径5.1cm。
5	65	良祐・光阿和与状	嘉暦2年 1月29日	1327	光阿・良祐	花押	なし	縦紙	32.1 × 46.6	1	楮紙	18	



【表3】皇學館大学文学部・恵良宏氏所蔵「保賀文書」目録

No. 番号	文書名	年月日	西暦	差出	印・花押	宛所	形態	法量 (縦×横)cm	紙数	料紙	折筋	備 考
1 138	内田熊若九代藤原兼家軍忠状	暦応4年 7月日	1341	藤原兼家	なし	なし	堅紙	29.4×37.1	1	楮紙	17	No.1～3は掛幅装。奥に上野頼兼の証判あり。
2 174	足利直冬軍勢催促状	貞和5年 8月28日	1349	足利直冬	花押	内田保賀三郎	堅紙	29.0×37.1	1	楮紙	14	奥左下裏に後筆の文字と朱印あり。
3 206	某宮將軍令旨	正平6年 8月13日	1351	右少将	花押	内田左衛門三郎	堅紙	30.9×38.6	1	楮紙	不明	
4 —	某書状断簡	欠	—	欠	—	欠	堅紙	28.2×47.3	1	楮紙	不明	後欠。紙背に聖教あり。
5 193	高師泰感状	観応1年 12月7日	1350	高師泰	花押	内田左衛門三郎	堅紙	28.2×37.7	1	楮紙	10	恵良宏氏所蔵。恵良氏による端裏書あり。購入時は薄い裏打紙があった。

- 註)
1. 刊本番号は『中世益田・益田氏関係史料集』のもの。
  2. No.4以外の文書名は『中世益田・益田氏関係史料集』に従う。
  3. 差出は比定可能な場合は実名で、不可能な場合は史料上の表記で示す。
  4. 宛所は史料上の表記で示す。

【表4】足利市民文化財団所蔵「保賀文書」目録

No. 番号	文書名	年月日	西暦	差出	印・花押	宛所	形態	法量 (縦×横)cm	紙数	料紙	折筋	備 考
1 97	足利尊氏軍勢催促状	建武3年 5月13日	1336	足利尊氏	花押	保賀熊若	堅紙	29.1×39.8	1	楮紙	15	裏打ちの上にさらに裏打ちあり。現在の額装にする際のもの。

- 註)
1. 刊本番号は『中世益田・益田氏関係史料集』のもの。
  2. 文書名は『中世益田・益田氏関係史料集』に従う。
  3. 宛所は史料上の表記で示す。

【表5】所蔵機関ごとの「保賀文書」概要

「保賀文書」 所蔵機関名	保賀氏内部で作成された 文書の点数 (A)	A/E (%)	將軍・守護・大將等の 発給文書の点数 (B)	B/E (%)	王家 (南朝) の発 給文書の点数 (C)	C/E (%)	益田氏の 発給文書の点数 (D)	D/E (%)	総計 (E)
日本大学	4点	4.3	28点	29.8	9点	9.6	53点	56.4	94点
花園大学	9点	40.9	12点	54.5	0点	0	1点	4.5	22点
皇學館大学 (恵良氏所蔵分を含む)	1点	25	2点	50	1点	25	0点	0	4点
足利市	0点	0	1点	100	0点	0	0点	0	1点
総計	14点	11.6	43点	35.5	10点	8.3	54点	44.6	121点